

アジア蔑視論と和魂漢才

— 日本文化の2つの潮流

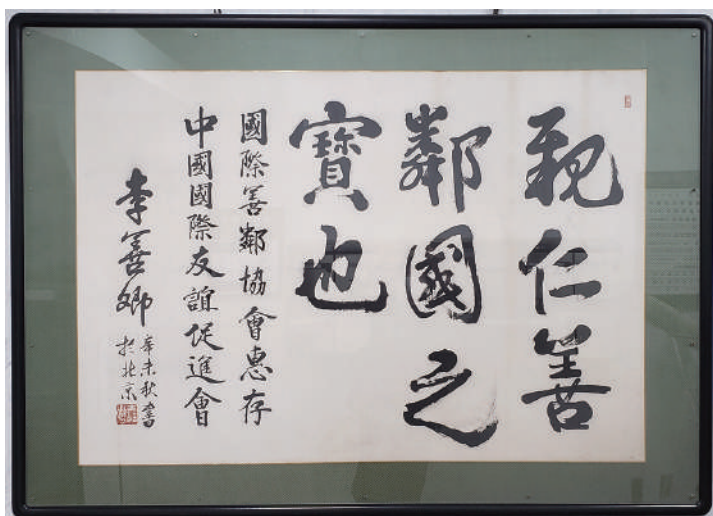
矢吹 晋（会員）

はじめに

「親仁善隣は国の宝也」の漢字8文字は、国際善隣協会会館1階ロビーの揮毫に明記されている。いうまでもなく典拠は『春秋左氏伝』だ。揮毫の由来については、筆者よりも適任の方に解説してもらうのがよい。私自身の体験をいえば、中国研究を志して以来60余年、いつも脳裏から「善隣」の2文字が消えることはなかった。嫌中・反中観の横行やこれを朝鮮半島に横滑りさせた嫌韓・反韓ムードの高まりに接して、『脱亜論』の過ちがいまだに克服できていないと感じて、歴史の教訓を顧みたい。

I. 朝河貫一の韓国併合批判

朝河貫一（1873～1948年）は、国際的評価に耐えうるほとんど唯一の歴史家である。彼はイェール大学で「大化改新——西暦645年の政治改革」を発表して、歴史学博士号を得て、母校ダートマス大学講師になった。折しも日露衝突は風雲急を告げ、彼は祖国の窮状を憂いつつ『イエール・レビュー』1904年5月号に「日露関係の諸問題」を寄稿した（矢吹晋編訳『ポーツマスから消された男』東信堂、2002年、83頁）。朝河の韓国認識は福沢諭吉に代表される



韓国蔑視論と天地ほどの違いがある。朝河は言う。

①日本にとって韓国の重みは、日本の活力の半分以上のものである。韓国が開国されるのか鎖国されるのか、強化されるのか弱体化するのか、独立できるか没落するのか、その帰趨によって日本の運命が決まる。

②対するロシアは、まず満洲、ひいては韓国まで手に入れることによって、東方を支配する海軍と通商基地を排他的政策に基づいて建設するであろう。加えて国家たらしとする日本の野心をくだき、飢餓と衰退に導き、日本の政治的併合さえ企むであろう。

③日本の観点から見ると、韓国・中国は内外の企業に対して等しく門戸を開放されるべきだ。その目的のためには、独立を堅持し、内部開発と自己改革によって、自らをより強化しなければならぬ。

④日本は韓国の独立を認めた最初の国である事実を忘れてはならない。そのためにもこそ、日清戦争という犠牲を払ったのだ。

⑤現在の日露戦争も同じ課題のために戦われている。というのは、韓国の独立は日本の死活に関わるからだ。

⑥それゆえ韓国が別の国【ロシア】の手に落ちないように、日本が韓国を併合すべきだという主張には断じて与することはできない。

⑦もし韓国がほんとうに自らの脚で立つことができないならば、その解決策は「併合ではない。韓国の資源を開発し、国家を再編成し強化することによって、真の独立を可能にすることなのだ」。

朝河貫一の透徹した東アジア国際情勢認識および日本の採るべき道についての彼の主張の核心は、この引用から読み取れるであろう。

さて、筆者がここで朝河の見解を紹介したのは、福沢諭吉（1835～1901年）のあまりにも有名な脱亜論という名のアジア蔑視論と対比するためである。このテーマと長年にわたって格闘してきた安川寿之輔（名古屋大学名誉教授）は、一連の労作のまとめとして仲間（雁屋哲、杉田聡）とともに

に『さようなら！ 福沢諭吉』というキャンペーン本をまとめた。私は「脱亜入欧」イデオロギーの核心が即アジア蔑視論にはかならないことを確認することは急務と痛感している。いまや福沢1万円札は退場しつつあるが、形を変えた令和の脱亜論変種は「価値観が異なる」とか、「価値観を共有するG7との連帯といった文言でいよいよにぎやかだ。G7の表現は先進国連合を指す〈中立的な表現〉と誤解されているが、紛れもなく旧帝国主義連合の言い換えだ。少なくとも脱亜の踏み台とされた隣人たちは、その記憶を忘れていない。2012年の「尖閣国有化」以後、急坂を転げ落ちるように悪化した日中関係、そして争点は少し異なるが、本質的には重なる日韓関係の現実を眺めて、脱亜論の犯罪的役割を改めて再考したい。

小論は、第一に、安川の脱亜論批判を紹介し、第二に、津田左右吉（1873～1961年）の中国蔑視論『シナ思想と日本』岩波新書、1938年）に対する先達・小倉芳彦（学習

院大学元学長・中国史）らによる批判を紹介する。第三に、日本帝国主義の侵略イデオロギーを担った福沢や津田の軽薄・悪質な論評は、『源氏物語』をひもとくことによって、そのいかがわしさが浮き彫りにされることを示す。

II. 侵略合理化のためのアジア蔑視——「ヘイトスピーチの元祖」福沢諭吉

安川寿之輔曰く——初期啓蒙期の福沢は、「支那、日本等、亜細亜の諸国」は日本と同じ「半開の国」と認識しており（『文明論之概略』第11章）、例えば1876年には朝鮮・中国への丸ごとの蔑視観は持っていなかった。1881年『時事小言』で、「専ら武備を盛にして国権を皇張する強兵富国」路線と、「無遠慮に其地面を押領して、我手を以て新築する」アジア侵略路線を確立した福沢は、翌1882年『時事新報』の社説「朝鮮の交際を論ず」において、「〔朝鮮国〕未開ならば之を

誘ふて之を導く可し、彼の人民果して頑陋ならば（中略）武力を用ひても其進歩を助けん」と主張して「文明」に誘導するという名目で武力行使と侵略を合理化した。つまり、朝鮮や中国が野蛮で「頑陋」であることが、武力行使の容認・合理化につながるという帝国主義的な「文明の論理」である。その様相は、次に見るとおり、「壬午軍乱・甲申政変」前後の「朝鮮人（中略）極めて頑愚（中略）凶暴」「頑迷倨傲」「無氣力無定見」「朝鮮（中略）妖魔悪鬼の地獄国」「支那人の怯懦卑屈は実に法外無類」「チャイニーズ（中略）恰も乞食エタ」「良餌」「支那人（中略）奴隷となるも、錢さへ得れば敢て憚る所に非ず」「朝鮮国（中略）滅亡こそ（中略）其幸福は大」などという発言である。

「天は人の上に人を造らず」から福沢を人間平等論者と理解するのは、最大の福沢諭吉神話であり、福沢は人間を平等にしたら、社会全体がうまく治まらないという哲学まで主張した確信犯的な差別主義者であった。以下に

彼の侵略合理化のためのアジア蔑視観を列挙するが、日本の民衆に対する差別意識も同様であった。福沢は、日本の民衆一般を「無氣無力の愚民」「無智の小民」「百姓車挽」「下等社会素町人土百姓の輩」などと蔑称しただけでなく、「所謂百姓町人の輩は、社会の為に衣食を給するのみ。獸類にすれば豚の如きもの」、「馬鹿と片輪に宗教、丁度よき取合せならん」、維新当初の「徴兵制・地租改正・学制」反対一揆に参加した農民は「馬鹿者・賊民・愚民」、自由民権の運動家は「無智無識の愚民・無分別者・神社の本体を知らずして祭祀に群集するに似たり」などと批判した。福沢は、そのアジア蔑視の退嬰的な「帝国意識」を近代日本人の「心性」になるまでに仕上げる役割を果たした。

いま、日本社会を汚染している「ヘイトスピーチ」は、安倍内閣の集団的自衛権の行使容認を筆頭とする政治的暴走とあわせて、日本が再び戦争国家に転落する瀬戸際にあることを示唆している（安川寿之輔ほか『さような

ら！福沢諭吉」39～42頁、花伝社、2016年）。

月脚達彦は、「脱亜論」をこう要約する。

①蒸気機関や電信などの「交通の利器」が発達した現在、西洋文明を受け入れることは、誰でも懼る「麻疹」のように、「東洋」ないし「亜細亜」の国においても避けようにも避けられない。日本は西洋文明を受け入れなければ西洋諸国からの「独立」を維持できないことを悟り、それを受け入れるために「旧政府」（徳川幕府）を廃滅させるなど古い慣習を破って、すでに「文明国」の方向に進みつつある。

②ところが近隣の「支那朝鮮」は「古風旧習」を捨てずに「儒教主義」を墨守して、西洋文明を受け入れようとしていないので、とても「独立」を維持できる見込みがない。もし明治維新を成し遂げた志士のような人物が両国に現れれば話は別だが、そうでなければ数年のうちに両国は「亡国」となって西洋の「文明国」に分割されるだろう。

③日本が「文明国」の方向に進みつつあるのに、「西洋文明人」が「支那朝鮮」を見て、日本もそれらと同じような国だと考えたなら、これは日本にとって迷惑である（月脚著ii～iii頁）。

脱亜論の骨子をこのように要約したあと、月脚は言う。「福沢が日本による朝鮮の植民地化を唱えたことは一度もない」。要約の後半部分からわかるように、当時の日本に中国・朝鮮を支援して「共に亜細亜を興す」ことを主張する人が多く、また福沢自身もそう考えていたのではないかと示唆されることだ（月脚著iii頁）。なるほど、福沢は慶應義塾に朝鮮初の日本留学生を受け入れ、朝鮮開化派と接触を始めた初期には「朝鮮改造論」の担い手を期待し支援していた。しかしながら、この脱亜論で明記しているのは、「日本は「支那・朝鮮」も「文明国」になるように援助して「共に亜細亜を興す」ことではなく、これらの「悪友」との付き合いを謝絶するべきである」という一文である。月脚は続ける。

「では「脱亜論」の発表を機に福沢

が朝鮮を「悪友」として「謝絶」してしまったのかと言えば、そうではなかった。特に1894年から95年の日清戦争の時期には、朝鮮の「文明」化と「独立」に関する社説が『時事新報』に再び頻繁に掲載されることになる。ところがその一方で、「脱亜論」掲載の7か月後の1885年9月から92年6月まで、『時事新報』には朝鮮に関する社説がほとんど掲載されていない。これは、イギリスによる朝鮮の巨文島の占領によって福沢が容易に朝鮮問題について発言できないほど、東アジアの状況が緊迫したからである。

さらに、日清戦争終結後の1896年2月に、艇態義塾の朝鮮人留学生第1号だった人物が主尊する朝鮮の政治改革が失敗に帰し、朝鮮の王室ならびに政府がロシアの影響下に置かれると、『時事新報』は朝鮮問題から基本的な手を引く態度を取った。こうした福沢ないし『時事新報』の態度の変化を理解するためには、その当時の朝鮮ならびに朝鮮をめぐる状況を適切に踏まえる必要があり、この点に朝鮮近代史研

究者が福沢の「東洋」政略論を扱うメモットがある」。

「さて、社説「脱亜論」を右に概観したような福沢の生涯の発言（と沈黙）の中に位置づければ、1880年以後、それまで西洋「文明」一辺倒だった福沢が、朝鮮人との接触を機に、西洋中心の近代国際秩序のもとで新たな日本とアジアとの関係を模索する過程で表明された、一時的・状況的な発言であったと解釈できる。もっとも、「脱亜論」をはじめとする福沢の中国・朝鮮に関する論説には、今日では到底容認されないような侮蔑的な言辞が綴られているのは事実である。また朝鮮に対して武力を用いたり中国と戦争したりしてでも朝鮮を「文明」化させて「独立」させなければならぬという「朝鮮改造論」は、当時の福沢およびその支援を受ける朝鮮開化派からすると「連帯」論であったとしても、今日の観点からすると侵略論である。しかし、「朝鮮改造論」は成就されることなく、福沢の死の9年後には、日本政府は朝鮮を「独立」させる

のではなく「併合」することになる。福沢の「朝鮮改造論」は言わば「挫折」の繰り返しだったのである」（月脚著iv～v頁）。

月脚は安川の強烈な福沢批判に反発したものの、結局は日本が「独立」支持ではなく、「併合」に至った経緯を踏まえ〈福沢の挫折〉と結論した。朝河貫一がイェール・レビューに冒頭の見解を示したのは1904年であり、福沢の死の3年後、併合の5年前である。朝河の先見の明は明らかであろう。

III. 中国蔑視論の源流を剔抉した 小倉芳彦の津田左右吉批判

歴史家小倉芳彦は、1972年に田中角栄訪中が行われた4年後にこう書いた。『歴研』編集委員会からの注文に応じたもので、「与えられた題で論文を書くのは、はじめてのような気がする。書きたい内容、書ける筋書きがあつて、題はあとからつけるのが私のふつうのやり方だから、こんどは勝

手がちがった。「津田左右吉と中国」。魅惑的なテーマである。津田という底無しの深淵。中国という無限大の広野。その二つが交わる接点を求めるのが津田「と」中国という課題の目標だとすると、これは容易ならぬ主題である」。

小倉は冒頭で、このテーマについて1976年に執筆する心構えを上記のように述懐している。小倉が先行する論評として挙げたのは、以下のものだ。

①家永三郎の著書（『津田左右吉の思想史的研究』）、②石母田正論文「歴史家について」（『歴史と民族の発見』1949年）、③旗田巍「日本における東洋史学の伝統」（1962年）、④上田正昭「津田史学の本質と課題」（1957年）、そして⑤増淵竜夫「歴史意識と国際感覚——日本の近代史学史における中国と日本」（1963年）などだ。これら5名の論客中、小倉が最も共感しているのは、増淵竜夫の観点、「歴史のいわゆる内面的理解に

ついて」である。近代化された日本を規準にして中国を「停滞」社会と見る津田の立場が、「果して本当の意味で克復されたのか」と重ねて問いかけているのも、まさにこのことがあるからだ。

小倉は言う、「日本の脱亜近代主義史学が、あからさまに表現の上で、あるいは潜在的な意識下で、中国や朝鮮を蔑視して来た痕跡を探し出すことは、容易だ」。しかしながら、中国・朝鮮蔑視の痕跡を探し出す手法自身が「外側の規準」ならば、問題はまた振り出しにもどる。小倉は、こうして「私の現在の課題は、津田左右吉という人物に対して、私なりの「内面的理解」を試みることにならざるを得ない」と再考して、津田の内面に迫る。津田の脱亜近代主義の原点は何か。小倉は津田著「白鳥博士小伝」(『東洋学報』29巻3・4号)にたどり着く。津田と白鳥庫吉(1865〜1942年)との師弟・交友関係は、白鳥が学習院の少壮教授だった時代から始まり、白鳥の死に至るまで半世紀続いた。それゆえ

「津田と中国」の問題は、「白鳥と中国」の問題に重なる。白鳥はドイツ留学後、学習院から東京帝国大学に移って東洋史学科を主宰し、満鉄に満鮮歴史地理調査部を設けた。津田ははじめ白鳥の私的な助手として、次いで正式の研究員となって、35歳の津田はようやく研究者としての生活を保証された。

辛亥革命直後の1913年、白鳥は「支那の国体と中華民國の現状」(『東洋時報』179号)の中で「シナでは天の命を受けた天子が天の代理者として民を治めるから、天子が失徳その他の事情で天命を行うことができなくなると革命がおこる。儒教においては君主の世襲を欲しない。しかるに日本では、皇室はシナにおける天それ自身にあたる。天自身が民を治めているのだから、万世一系が国体となるのは当然だ」と書いた。同13年に津田は『神代史の新しい研究』で、日本の神代史の政治思想が皇室を万世一系とするのは、「かの天子と人民とを天地の如く相対立しているものとする支那思想と

は全く趣が違う」と力説した。小倉は言う。白鳥と津田は、「辛亥革命前後の中国の動きを眼前にしつつ、日本にとってはシナの革命思想は不適合で、万世一系こそが日本の国体であったし、またあらねばならぬという確信を抱いていた」「これはこの2人の中国の革命運動に対する理解の質を示すと同時に、2人のその後の東洋学・シナ学上の業績を生み出す核となった」。小倉は津田論文「シナの史というものの」(1946年に復刊された最初の『歴史学研究』122号掲載)こそが「津田史学の核心」だと結論する。

①シナ人には「事実としての民族」(あるいは「群衆としての生活」)はあったが、民族集団の意識はなく、従って国民を形成しなかった。

②民族・国民としての集団生活こそが歴史の主体だから、それを欠くシナでは、王朝の歴史や記録・編纂物はあるても、私たちの言う意味での歴史は書かれなかった。

③シナには歴史的発展がないから歴史観がなく、文化が停滞しているから

シナ人は自己本位の名利を求め、他に関心のもちようがなく、歴史叙述の必要が起らなかった。

④歴史が人によって作られることを知らぬから、応報のみを重んじて過程を重んじない。つまり生活の社会的・歴史的意义が考えられていない。

小倉はこの津田流史観を「徹底した『ないないづくし』と呼ぶ。その対極点に『あるあるづくし』として想定されているのが、ヨーロッパ近代であり、それを受容した近代日本だ。『論語と孔子の思想』（1946年）の結語で、津田は「思想の研究に必要なのは、思想を学問研究の対象とする立場」であり、こういう研究方法は、「それぞれの思想についていろいろの特殊の伝統と偏執とをもっている国【中国】の学者にはむづかしいが、わが国【日本】ではできることである」と断言している。ここで小倉は、津田の〈自信の強さ〉（独善と読む―矢吹注）に啞然とし、この自信が生み出した1920年代以降の津田の研究は停滞せるシナを観測する姿勢から出

たものと認識する。そして小倉は、「これは、津田ひとりだけの問題だったのではない」と結論する。

然り、これは日本の対中侵略戦争に協力したすべての日本人の問題であった。小倉は、「残念ながら日本の歴史家『における』中国は、①時の日本政家『における』中国と同質であるか、②時の国際的主流『における』中国の処遇と波長を同じくするものにすぎなかった」と結ぶ。

1945年の敗戦は、原爆による対米敗戦であり、対中敗戦に非ず、とする論調が大手を振ってまかり通る。1945年敗戦は、日本史も、日本人の歴史観も、何一つ変えることはなかった。日中不再戦は、あつという間に〈台湾有事〉と置換された。かくて日本はいま中国蔑視・朝鮮蔑視の大流行である。白鳥庫吉の邪馬台国Ⅱ九州論が、日韓併合前後の時期に提起されたのは偶然ではない。〈鯨面文身の先祖〉を畿内から追放するために発想されたのであり、まさに白鳥帝国主義史観の核心にほかならない（矢吹著『天皇制

と日本史』補章、集広舎、2021年）。

IV. 『源氏物語』から読む和魂漢才

中西進の論考「隠喩と暗喩——源氏物語における白氏文集、長恨歌（1）（2）」（国際日本文化研究センター『日本研究』第4巻197～224頁、第5巻105～133頁）を読むと、漢籍からの膨大な引用が原典と並べて解説されている。これらの直接的引用あるいは間接的暗喩がなければ、『源氏物語』は成り立たないとさえいつて過言ではあるまい。『源氏物語』の骨格として漢籍が縦横に駆使されている事実を見失うことは許されまい。漢籍から何を学んだのか。一つは白楽天〈長恨歌〉の引用からわかるように玄宗帝と楊貴妃の〈傾国と傾城〉物語だ。これは男女関係の話だから、一般に〈色好み〉のテーマと理解されている。しかしながら、これは同時に〈帝王学・皇后学〉のテキストでもある。帝王学

としての『源氏物語』の成立と流布を最もわかりやすく説いているのは、著者紫式部が自著の成立を語った『紫式部日記』である。

藤原道長は娘・中宮彰子の里帰り出産時に一条帝への土産として冊子本を作らせた。——中宮様が宮中にお戻りになる日が、少しずつ近づいてきます。けれども次から次へと若宮のご誕生に伴う儀式が続きますので、女房たちは慌ただしく、落ち着かない日々を送っていました。そんな中で、中宮様は、物語の本を新しくお作りになりたいという意向を持たれ、早速、物語の制作が始まりました。ぐるぐる巻く巻物（卷子本）ではなく、一枚一枚紙をめくってゆく冊子本です。宮中にお戻りになる時の、お土産の目玉になさりたいのでしょうか。このプロジェクトの資任者と言いますか、中心となっているのが、ほかならぬ私でした（島内景二『新訳紫式部日記』花鳥社、2022年、278頁）。

中宮様の肝煎りで始まった「源氏物語」冊子本の制作プロジェクトです

が、殿（道長様）のご協力なしには不可能です。殿は、産後の健康が優れない中宮様のお体を心配されていますが、これから冬の寒さも厳しくなってくるゆきます。「子どもを産んだばかりの母親は健康第一で、特に冷氣には気をつけねばなりませんぞ。それなのに、寒い朝から冷え込む晩まで、新しい物語の冊子作りですか。大概になさったほうがよろしいですよ」と、口ではおっしゃるのですが、惜しみなく援助してくださるのです。清書に必要な上質の薄い紙をたくさん、それに筆や墨なども、殿は中宮様のお部屋に持ってきてくださいます（島内279頁）。

『紫式部日記』の記述からわかるように、若宮出産後に里帰り先から宮中へ帰る際の一条帝への土産として持参させるためにこそ、『源氏物語』冊子本が作られた。当時は極めて高価な、大量の上質の薄い紙と筆や墨を道長が用意したことによって、冊子本は成ったことが、ここで証言されている。島内解説からわかるように、一条帝は中宮彰子の手元にある『源氏物語』を（読み聞かせ）させることによって、『紫式部の漢才』を的確に理解した。この事実は何を意味するか。『源氏物語』は一般に〈色好み〉の読物と理解するようになって久しいが、一条帝たちは、〈色好み〉と同時に長恨歌の〈傾城・傾国物語〉、すなわち帝王学の副読本として読んだのだ。この伝統は徳川綱吉の側用人柳沢吉保の側室正親町町子『松蔭日記』まで続いたと島内景二が論じている（NHK古典講座「紫式部日記（23）」2022年3月5日ほか）。

このように、私は少女時代から漢籍に深く親しんでいたのですが、少しずつ、漢籍や漢字に疎くなってゆきました。というのは、「漢学は男性のものです」が、その男性だって、漢学の素養をひけらかすようなタイプの人は、どういうものではないでしょうか。出世だって、ろくにできないようですよ。まして、女性ならばなおさら、漢学の素養を持つただけで、皆から敬遠されることが多いでしょう」と助言されることが多くなり、私も、その忠告を、身に染

みて受け止めたのです。その結果、「一」という字すら、自分は書いて見せないようになりました。仮面を永くかぶり続けていると、いつのまにか仮面が取れなくなるように、演技がいつのまにか本質となり、まことに、私が無学であることは、我ながらあきれるばかりです。少女時代に読んだことのある漢籍などは、もう自分には親しいものではなくなり、読むことはおろか、手に取って眺めることもなくなりました。それなのに、「漢籍に詳しい女性」という私の噂はますます大きくなる一方で、とうとう、「日本紀の御局」などという、とんでもない渾名をつけられたと聞きました。（中略）それなのに、中宮様の御前で、『白氏文集』のあちらこちらを私に読ませなさったことがあります。それによって中宮様の好奇心や向学心がいたく刺激された見え、漢詩文についてもっと詳しいことを知りたいと思われるようになっていました。それで、一昨年の夏くらいから、人目につかないように細心の注意を払い、中宮様の近くに誰も

人がいない時を見計らって、『新楽府』という漢詩を、お粗末ながら教えていますが、そのことも秘密にしているのです。この『新楽府』は、白楽天の『白氏文集』の巻三と巻四に当たっていますが、為政者の参考になる内容を多く含んでいるのです。このことは、私だけでなく、中宮様も内緒にしておられました。殿（道長様）も、主上様（一条帝）も、二人の秘密をいつのまにかお知りになりました。私たちが読んでいます『新楽府』を初めとする漢籍を、殿は能書家に書かせて、中宮様に献上なさったのでした。このように、中宮様が私に漢籍を教えさせて読んでおられることを、私に「日本紀の御局」という渾名を付けた「うるさ型」の左衛門の内侍は、まだ知らないのでしょうか。もし、彼女がこの話を聞きたければ、どんなに私を批判するか、わかったものではありません。『文集の御局』や「楽府の御局」では済まないでしょう。中宮様まで巻き込んだのですから。この世の中は、何から何まで、複雑な出来事がほどこよう

もなくこんがらがっていて、すっきりしません。特に人間関係の網の目は、厄介なものですね（島内480、482頁）。

島内の名訳が教える一連の〈史実〉から、①日本文学の成立期における中国古典の役割とその意義を明確に再認識すべきこと、②総じて日本文化総体が中国文化の決定的影響を受けつつ、〈和魂漢才〉の精神によって育まれてきた史実に改めて眼を向けたい。それはアジア蔑視論の対極であろう。

筆者がいま自明の史実に改めて眼を向けよと指摘するのは、新・暴支膺懲国会決議（2022年2月1日）を皮切りに、新・脱亜論Ⅱアジア蔑視論の風潮がますます賑やかになりつつあるからだ。〈新・暴支膺懲決議〉や〈新・脱亜論〉の復興（Ⅱアジア蔑視論）によって日本の未来を切り開くことはできない。これらの旧日本帝国主義の負債を止揚することによってのみ、アジアの隣人との共生が可能となる。